

紫式部集32—35番歌についての考察

「文散らし」をめぐつて——

渡辺 健

1

「紫式部集⁽¹⁾において、紫式部の夫・宣孝⁽²⁾関係の歌は34首と最も数が多く、家集編纂時における式部の問題意識の大きさを示している。この家集は、56歌と57歌との間を境として、大きく前半と後半に分けることができるのだが、その前半部では、宣孝の求婚・結婚生活・死後の哀傷など、時間の経過に沿って宣孝との交渉のあらましがたどれる構成になっている。このことから、家集内部における宣孝関係歌の配列意図の一端が窺われるが、そのようにして家集の配列に従い、二人の交渉をたどっていくと、32—35の四首の贈答は、特に印象的な事件として読者の目に映る。

もとより人の女⁽³⁾を得たる人なりけり。
文散らしきれりと聞きて、「ありし文ども取り集めておこせすは、返り事書かじ」と、言葉にてのみいひやりたれば、みなおこすとて、いみじく怨じたりければ、正月十日ばかり、十日ばかりのことなりけり

32 閉ぢたりし上の薄氷⁽⁴⁾解けながらさは絶えねとや山の下水
すかされて、いと暗うなりたるに、おこせたる

33 東風⁽⁵⁾に解くるばかりを底見ゆる石間の水は絶えは絶えなむ

「今は物も聞こえじ」と、腹立ちければ、笑ひて、返し
34 言ひ絶えばさこそは絶えめなにかそのみはらの池をつつみし
もせむ

夜中ばかりに、また

35 だけからぬ人かずなみはわきかへりみはらの池に立てどかひ
なし

この贈答歌群は、28—31の、宣孝が式部に求愛していた頃の歌群に統くもので、二人の婚姻が成立して間もないころのものと思われる。贈答の時期は、詞書に「正月十日ばかり」とあるのを、暦日によつて長保元年（九九九）正月十一日以降同月中旬のことと算定する木船重昭氏の説⁽⁶⁾に従う。式部と宣孝の結婚については諸説あるが、家集から推察するところでは、長徳三年（九九七）立春に、父・為時の赴任に従つて越前に下向した式部の許に、宣

孝から求愛の文が寄せられ（28歌）、以後二人の間に交渉が続い

2

て（29—31歌・74—75歌。なおこの間に式部帰京）、長徳四年冬に婚姻が成った（76歌はその直前のもの）と考えるのが、現在最も妥当な見解であると思われる。

この婚姻成立時、二人の年齢は式部25歳、宣孝49歳と推定されていて、父娘ほどの年齢の開きがある。また宣孝は、「尊卑分脈」によればすでに三人の妻を持ち、それぞれに子を儲けている上、家集29の詞書に「近江守の女懸想すと聞く人」と紹介されているように、浮薄な性向の人物であった。それゆえ式部は、32の詞書で「もとより人の女を得たる人なりけり」といつているように、夫となる人の女性関係に不安を残しながらの結婚であった。

したがって、「文散らしけりと聞きて」に始まる出来事は、式部がかねてから抱いていた結婚への不安が、現実になったものといえる。ただ、従来の研究では、この一件の深刻さを一方では認めながらも、この贈答を痴話喧嘩的なものと見たり、そこに遊戲性を指摘するむきが多かった。確かに、二人の間に交わされた歌だけを問題にする限り、そのような解釈も首肯しうるのであるが、「意氣の合つた夫婦間の趣向とか手練手管の応酬」や、「歌合戦」といったような位置付けには、やはり疑問が持たれる。そこで本稿では、「文散らし」に関する当時の用例をできるだけ参照しながら、式部にとってこの贈答の一件がどのような意味を持つていたのかを探っていきたい。

この贈答が単なる遊戯性で片付けられないことは、宣孝が式部からの文を「散らし」と聞いての、式部の反応に窺われる。「散らす」とは、「誰彼に口外する。言いふらす」という意味で、ここでは宣孝が式部からの文を他人（おそらく他の妻たち）に見せたから、式部が怒ったのである。しかし、「ありし文ども取り集めておこせずは、返り事書かじ」というのは、相当な怒りで、絶縁を宣言するにも等しい抗議である。

なぜなら当時、恋人からの文を相手に返却するのは、一般に、二人の仲が絶える際に行われることであった。

師賢朝臣もの言ひわたりけるを、絶えじなど契りて後もまた絶えて年ごろになりなければ、通はしける文を返すとて、その端に書きつけてつかはしける
（後拾遺集・雜二）
式部命婦

行く末をながれてなにに頼みけん絶えけるものを中川の水
どもを取り集めて返すとて、詠みて贈りける
（後拾遺集・雜二）

右大臣、住ますなりにければ、かの昔おこせたりける文
頼めこし言の葉今は返してむわが身ふるれば置き所なし
典侍藤原因香朝臣

返し
近院右大臣

今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや見む

意識にあったと思われる。

先々通はせたまひける御文とて、今は返したてまつれ

たまふとて、御息所

やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣く泣くもなほ返すまさ

れり(元良親王集)

このような用例から、新婚間もない時期に、夫に対してそれまでの文を返却するよう要求することの異様さが理解されると思う。なお、「源氏物語」^[1]「浮舟」卷には、薫からの文を宛先違いを装つて返却した浮舟に対し、乳母の右近が、「殿の御文は、などて返してしまつらせたまひつるぞ。ゆゆしく、忌みはべるなるものを」と諫める場面がある。不吉で差し障りのあることと聞いておられますのに、というのだから、恋文を返すのは、やはり当時ではタブーと考えられていたと思われる。こうしたことからも、式部が、文の返却を求める自分の行為の意味を知らなかつたはずはないであろう。

また、式部が宣孝に、「言葉にてのみいひやりたれば」と、口頭のみで抗議の旨を伝えさせていることの意味も重要である。これは大野晋氏のいわれるように、「歌を書いて送れば」「これまでの手紙をすべて返せ」といつてやる主旨に反する^[2]からだけではなく、南波浩氏のいわれるように、「当時においては、消息を付げず、使いの者の口上だけで伝達するというような行為は、無礼な仕打ちであり、冷淡さを表わすものであった」ことも、式部の

女三の宮との結婚第三夜、宮と臥している源氏の夢に、紫の上が現れる。源氏は驚き、鶏が鳴くのを待つて急ぎ退出するが、紫の上は帰ってきた源氏に打ち解けない。源氏はその日、終日紫の上の機嫌を取り繕っているうちに、夜になっても宮の許へは行けなくなってしまった。源氏は宮に、「今朝の雪にここちあやまりて、いとなやましうはべれば、心やすきかたにためらひはべる」と、参れない由の消息を送る。それに対して、宮の乳母は、「さ聞こえさせはべりぬ」とばかり、言葉に聞こえたり」とある。源氏の見え透いた言い訳への反発であろうが、乳母の札を失した振舞に、源氏は「異なることなの御返りや」、そつけないご返事もあつたものよ、と不快に思ったのである。

したがつて、式部が宣孝に文の返却を、しかも口上で要求したのは、二重の意味で非礼に当る。しかし、式部がこのように非常識な行動に出たのは、決して思慮分別がなかつたわけではなく、孝の反省を促したいという意図があつたものと思われる。絶縁も辞さず、という態度であるから、これは相当強い抗議であつた。

ところで、当時、恋文が当事者以外の者に読まれることがなかつたわけではない。

当時の日記や物語、私家集の類を見ると、男から女への恋文を、結婚に発言権を持つ女の親（あるいはその親代り）が見るのは普通のことであつたし、また女君付きの女房が、男から女君への恋文を見たり、時にはその返事を代筆したりというのも、よくあつたことである。

ただ、女から男への文を、男が他の女（妻ないし愛人）に見せることとなると、少し事情が違つてくる。男の妻同士が顔を合わせることのない當時、文は書き手の人柄や教養を判断させる材料になるから、文を見る側の女は、見られる側の女よりも優位に立つことになるといえる。そこには、次に見るような男の思惑が働くこともあるつたようである。

異女の文を、妻の「見む」と言ひけるに、見せざりければ、怨みけるに、その文の裏に書きつけてつかはしける

よみ人しらず

これはかく怨み所もなきものをうしろめたくは思はざらん

（後撰集・恋二）

この例では、男が愛人からの文を見せなかつたので怨んだ妻に對し、男はその文の裏に歌を書き付けて与えた、とあるから、も

ちろん妻はその文の中身を見たのである。男の歌は、この文はあなたが怨みに思う筋合のものではないから、不安を覚えないでほしい、と愛人の存在に嫉妬する妻をなだめるものである。ここで男が愛人の文を見せたのは、妻に對して秘密を持たない意志を示すとともに、他人の文を見るによる心理的なうしろめたさを利用して、巧妙に妻の嫉妬を抑さえようとする思惑もあつたのである。

これと似た例として、「源氏物語」「源標」「松風」卷で、源氏が紫の上に明石の君からの文を、完全にではないが、見せる場面を挙げることができる。明石から帰京後の源氏は、ますます紫の上への愛情が増して、他の妻たちの許に通うことも少なくなる。紫の上がいつも側にいるので、源氏は明石の君からの文も隠すことができず、紫の上にそれとなく見せる。「源標」では死名だけを見せ、「松風」では文を広げたまま、紫の上の見るにまかせる。これが源氏のジエスチュアであることはいうまでもないが、そこには、二人が秘密のない仲であることを示し、紫の上の嫉妬をなだめる意図があつたと思われる。

ここで宣孝の場合、式部の文を他の妻たちに見せた意図は、家集の記述のみからは明らかにしがたい。ただ、式部の知らないところで、筆者が先に述べたような事情があつたことも、一つには想像される。

またもう一つには、宣孝はそうすることで、自分の虚栄心を満

足させた、という側面もあったことが想像できる。式部の文は、婚前の交際の頃のものと思われるが、前述した、宣孝が求愛していた頃の歌群28—31によつて、それを見ていいみたい。

28歌は、長徳二年（九九七）立春、越前の国府にいた式部の許に、宣孝から「春風に氷が解けるように、あなたもそろそろ私も打ち解けてもいい時期だ」と言つてきたのに対し、式部が「春なれど白嶺のみゆきいやつもり解くべきほどのいつとなきかな」と、突き放すかのような態度で答えたものである。29歌では、式

部に求愛する一方、近江の守の娘にも言い寄つていた宣孝が、「私に一心はない」と再三言い送るので、式部は「みづうみに友よぶ千鳥ことならば八十の湊に声絶えなせそ」、同じことならあちこちの女性に声をかけ回つたらしいが、と皮肉つてゐる。30歌は、海人が薪を伐り出して積み上げ、海辺で塩を焼く絵を描いて宣孝に見立て、「よもの海に塩焼く海人の心からやくとはかかるなげきをやつむ」という歌を添えて贈つたものである。歌の裏の意味が、宣孝の浮気心を揶揄するものであることはいうまでもない。31歌では、文の上に朱をばたばたと垂らして、「私の涙の色を見てくれさい」と訴えた宣孝のせつかくの趣向も、「くれなゐの涙ぞ」とどうとまるるうつる心の色に見ゆれば」と、あつさり切り返されている。

紙幅の関係で、式部歌の技巧についてまでは言及できなかつたが、このように見てくると、宣孝が式部の才氣あふれる歌や趣向

を、他の妻たちに自慢したくなつたことは想像できる。「相模集」を見ると、男が相模の文を他人に見せたり、その歌稿を持ち出したりした事実があつたことが分かるが、これは相模の歌人としての名声によるものである。宣孝も、見せて自分が恥をかくような文なら、他人に見せたりはしないだろうから、「文散らし」が式部の才能を高く評価していたことによる行為との可能性も指摘できる。

4

しかし、このようにして他人に文を見せられた女の側の嘆きや屈辱感は、想像に難くない。彼女たちの中には、胸一つには余る思いを、歌に託して男に訴える者もいた。

人のもとに文つかはしける男、人に見せけりと聞きて、
つかはしける
(よみ人しらず)

みんなに文見せけりな水無瀬河そのわたりこそまづは浅けれ
(後撰集・雜三)

この例は、自分の文を他の女に見せた男の心浅さをなじつたものである。また「相模集」には、「人の知るべきにもあらぬことを残りなく文よりはじめて顎はすと聞く人に、懲りずまに取り寄せて、宵居の手習に書きつくる」との詞書で、「いかにせむ葛の裏吹く秋風に下葉の露の隠れなき身を」以下、初句と第五句をそれぞれ「いかにせむ」「隠れなき身を」で統一した一連の歌九首

がある。

しかし、女の側からのこのよくな訴えを、男がまともに取り合ふことは、まずなかつたようである。

いかなることが聞きける、人のもとより

あだにさは散りける言の葉につけて人の心を風とぞ見る

返し

あだにまだ散りも慣らはぬ言の葉を風の風によそへざらなむ

(範永集)

文どもあだだしう散らすと聞きし人を、本意なしと怨

みたりしかば、かれより

常盤山露ももらさぬ言の葉の色なるさまにいかで散るらむ

返し

色変へぬ常盤なりせば言の葉を風につけても散らさましやは

(相模集)

女から怨まれて、素直に反省するほどの男なら、最初から文を他人に見せたりなどしないであろう。こうした用例を見ても分かる

ように、男はあるいはしらを切り、あるいは聞き直り、といった態度で女に応じている。

紫式部の場合も、文を返せとの式部の抗議に対し、宣孝は開き直つて「みなおこす」と、その通りにしてきた。しかも、「いみじく怨じたりしかば」とあるから、おそらく怨み言を連ねた文を添えていたのであろう。

式部の、「ありし文ども返り事書かじ」という言葉は、裏返せば、自分の文が返却されたら宣孝に返事を書くということになる。しかし、絶縁が成立してからの返事はありえないから、式部の言葉は明らかに矛盾している。宣孝はそれを逆手にとつて、こちらは絶縁しても結構と居直り、式部に搔さぶりをかけてきた。結局式部が、「返り事書かじ」の前言を自ら達えて歌を贈ったのは、宣孝の加えた圧力に屈したことを意味するといえる。

鈴木日出男氏も指摘されているが、ここで通常の男女間の贈答歌の場合とは異なり、式部の方から宣孝に歌を詠み贈っていることに注意したい。28—31の式部歌がみな、宣孝への返しであると考えられるのに、なぜ新婚間もないこの時期に、式部が宣孝に歌を贈らなければならなかつたのか。そこには、一度はただことば(日常語)で、怒りを包まずに伝えたことが宣孝の態度を硬化させた以上、歌によってでなければ、宣孝の心を、自分につなぎとめることはできないとする式部の判断があつたのだろうと思われる。

式部が宣孝に贈つた32歌は、「二人の間の淡い隔たりが解け、ひそかに愛情を交わすようになったのに、それでは二人の仲も絶えてしまえとおっしゃるのですか」という意味である。文を返せと強硬な姿勢だった式部も、ここではすつかり折れて、宣孝に和解を求めようと下手に出ている。その態度に宣孝は「すかされ機嫌を取られ」て、「いと暗うなりたる」頃に歌を返してきた。

おそらく式部は、それまで心を焦られながら待っていたであろうから、今夜の訪れがないと分かりきった時間に届いた文には、安堵とともに落胆もあつたに違ない。

33の宣孝歌は、「打ち解けていたのは私ばかりで、あなたの愛情は底が見えたから、あなたとの仲など絶えるなら絶えてしまつても構わない」というものである。責任転嫁もはなはだしい、といつたところだが、こうして宣孝が返歌を贈つてきた以上、最悪の事態は回避されたわけである。「今は物も聞こえじ」とあるのは、おそらく宣孝が33歌に添えた付言で、「腹立ち」とはいっても言葉の上での演技に過ぎない。というのは、「もう何もいわない」といながら返事を贈つてくるのは、「返り事書かじ」といながら、結局自分で歌を贈つてきた式部に対する皮肉に他ならないからである。

式部が「笑ひて」とあるのは、この拗ねた子供のようなボーゼがおかしかったのである。式部が34歌で、先程とは打って変わった態度を示しているのも、このように宣孝が式部に、歌で切り返す余地を残しているからである。「もう何もいわない、絶交だとおっしゃるなら、その通り絶交するのがよろしくございましょう。あなたがお腹立ちだからといって遠慮などするのですか？」このように、絶交の責任を相手に転嫁するのは、式部が宣孝の造り口をそのまま真似たのである。今度はこちらの分が悪くなつたと見た宣孝は、「夜中ばかり」、夜更けに返歌を贈る（35歌）。

「立派でもない、人數にも入らない私は、いきりたつて腹を立てみても、何の甲斐もないことです」。宣孝は、滑稽を装つた降参のジェスチュアによつて、事態の收拾をつけている。

5

ここでの宣孝の対処の仕方には、①式部の抗議に対し、その意图を逆手にとつて応じる構えを見せてゐる点、②式部の和解に応じる文を届ける時間を見らせている点、③自分を卑下し、降参を装つて事態の收拾を図つた点など、不自然なまでの余裕を指摘できる。また、一件の発端となつた宣孝の行為の問題が閑却され、式部は自ら折れて和解を求めた手前、それを再度追及できないようになっている点にも、意図的なものが感じられる。

これらのことから判断すれば、宣孝の「文散らし」の意図は、他の妻たちの機嫌を取り繕うとか、自分の虚榮心を満足させるというより、他ならぬ式部に向けられたものだったと思われる。だとしたら、宣孝はなぜこのようなことをしたかということになるが、それには、次に挙げる『蜻蛉日記¹⁵』の例が参考となるのではないだろうか。

道綱母が兼家と結婚した翌年のこと、二人の間には八月末に男子が生れ、その頃の兼家の愛情は細やかであるように見えた。だが九月のある日、彼女は兼家が置き忘れていた文箱の中から、他の女に宛てた恋文を発見してしまう。彼女は思いがけないこと

に呆然とするが、せめて見たことだけでも知らせようと、文の端に歌を書き付ける。それは、「うたがはしほかに渡せる文みればここやとだえにならむとすらむ」と、兼家に新しい通い所ができる。訪れが途絶えることへの不安を形にしたものであった。果して十月の末頃、兼家が三夜続けて訪れないことがあつたが、兼家は結婚のことは口に出さず、平気な顔でいる。しかしある日の夕方、彼女の許を辞去する兼家の様子が不審なので、彼女は召使に後をつけさせると、兼家の車は「町の小路なるそこそこになむ、となりたまひぬる」ということであった。彼女はこれによつて、兼家の新しい通い所が、町の小路に住む女であつたことを知るのである。

この経緯を見る限り、兼家が彼女の許に文箱を置き忘れたのは、偶然とは思われない。兼家には、後に結婚することになる愛人の存在を、事前にそれとなく知らせようとする意図があつたのだろう。そこで出産して間もない彼女への配慮が窺われるが、一方では、文を盗み見たことによる罪悪感を利用して、巧妙に彼女の嫉妬を押さえていることも知られる。

宣孝の「文散らし」には、兼家が道綱母に巧妙に愛人の存在を受け入れさせたような事情があつたのではないだろうか。式部に熱心に求愛していた宣孝は、婚姻が成立してからも、愛情を示そ

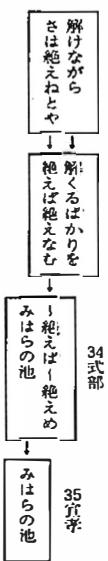
うと、しばらくの間は夜離れなく式部の許へ通つていたと思われる。だが、前述したように、すでに三人の妻があつた宣孝として

は、新しく加えた妻を、いつまでも特別扱いすることは無理だったに違いない。元の妻たちの忍従にも限度があろうし、やがて式部への訪れが少なくなることは、はつきりしていたと思われる。そこで宣孝は、なるべく早い段階で、この事実を式部に受け入れさせる機会を窺つていたのだろう。そのために、わざと式部からの文を他の妻たちに見せ、噂を聞いた式部が逆上して抗議していく言葉尻をとらえて、自分にとつて式部は数ある妻のうちの一人にすぎないから、絶縁も構わないとの認識を示したのである。宣孝はこのことによつて、式部に巧妙に一夫多妻の現実を押し付けたのである。それは有無を言わせぬやり方に見えるが、夜離れが避けられないのであれば、後になつて愛情の衰えからそうなつたと解釈されるよりは、この方がよいとの判断があつたのかも知れない。また宣孝は、決して式部を精神的に追い詰めているわけではなく、式部を笑わせたり、歌によつて切り返す余地を残す配慮も忘れていいないのである。⁽¹⁾

式部としても、この宣孝の裁量は認めるしかなかつたであろう。ただ、28—31の歌のやりとりに見られるように、式部を一人の人間として対等に扱つてくれていると信じていた宣孝に、急に裏切られた思いはあつたに違いない。32歌の詞書に、「もとより人の女を得たる人なりけり」とあつたのは、自分にとって宣孝はただ一人の夫であるのに、宣孝にとって自分は数ある妻のうちの一人に過ぎなかつたことを、この一件で現実として思い知られたこ

とへの嘆きを示唆していると思うのである。

さて、今まで「文散らし」の一件が、式部にとってどのような意味を持っていたのかを考察してきた。そこでは、家集の記述が簡潔に過ぎると、式部の立場の反映であるため、「文散らし」に関する当時の用例をできるだけ参照しながら、式部・宣孝双方の立場に照明を当てるよう努めた。その結果からいえば、筆者は通説のように、この贈答歌群を痴話喧嘩とか遊戯性といった観点だけだと見るることはできないのである。



距離をかたどつ」たものとされるが、そこまでいかなくとも、式部にとってこの贈答が、おたがいの愛情を確認しあう行為からほど遠かつたことは、容易に察せられる。そして、ここで式部が宣孝の真実の愛情を確かめえない事情は、家集後半部で語られる宣孝の夜離れや前渡りを用意するものである。「嫡姉日記」にも通じる世界であるが、当時一夫多妻の下で、このような苦しみを味わう女性が多かったことは、筆者が事新しく述べるまでもない。「文散らし」の一件は、こうした当時特有の結婚形態の中から起つたものであり、それを背景としたこの贈答歌群も、そこでの男女異なる立場を考慮において初めて初めて、その本質が理解できると思うのである。

注

確かにこの贈答歌群は、ここに図示したように、歌ことばの上では対応しているように見える。だがそこには同時に、二人の仲が絶える絶えないに執着する式部（34歌）と、そこから問題をそらそうとする宣孝（35歌）という構図も読み取れる。これは結局、筆者が先述したような、一人の結婚に対する姿勢の相違を浮かび上がらせているのであり、そこでは、贈答以前の感情の齟齬が、そのまま贈答の場にも持ち越されているのだといえよう。

鈴木日出男氏はこの贈答歌群について、「二人の心の絶望的な

1 本稿において「紫式部集」の本文は、新潮日本古典集成「紫式部日記・紫式部集」に掲載した。その底本は古本系の陽明文庫本で、歌数は一首である。

2 「紫式部集の解釈と論考」（笠間書院81・11）
3 藤谷朴氏の説による。「紫式部日記全注釈」（角川書店73・3）下巻参考照。

4 「尊卑分脈」によると、宣孝は藤原源穂女、平季明女、藤原朝成女を妻としていた。

5 この一文は、31歌の左注であると同時に、32歌の洞書もある。

この贈答についての主要な説を擧げると、清水好子氏「この何首かのやうとりのうちに、父親ほどの年齢の夫と娘のような妻の位置が入れ換つて、式部のほうに、母親がきかぬ子を叱つたりおだてたりする気配が出てきている」(岩波新書「紫式部」⁷³・4)、木船重昭氏「深刻陰湿どころか、歌合戦の興題と機知と技巧とを存分に楽しんで陽気で、心はずんでいる」(前掲書)、南波浩氏「式部がこれほど言いたいことをズバズバ言つても、それを大きく包容してくれた宣孝であつたことに、式部も満足していたことだろう。二人の贈答は、火花の散る喧嘩をしているようでありながら、おたがいの気持を確かめ合い、愛情を確認し合つてゐるものであつた」(紫式部集全評釈)笠間書院⁸³・6)、重松信弘氏「ただこのいさかいの歌だけを見ると、才女式部の面目を遺憾なく發揮して、宣孝を手玉にとつていて、まことに面白」(源氏物語研究叢書Ⅴ紫式部と源氏物語)風間書房⁸³・10)など、痴話喧嘩や遊戯性で解釈するのが通説化している。

南波浩氏前掲書

2に同じ。

【岩波古語辞典・補訂版】

以下、勅撰集・私家集の本文の引用は「新編国歌大観」に挿つたが、誤解の便宜を考慮して、表記を私に改めた。

以下「源氏物語」の本文の引用は、新潮日本古典集成本に挿つた。

【古典を読む】源氏物語(岩波書店84・5)

南波浩氏前掲書

紫の上はこの他にも、末摘花から源氏への文(玉鬘)、玉鬘から源氏への文(行幸)、女三の宮から源氏への文(若菜上)を見ている。源

氏の最も身近にいる妻の特権であり、源氏に重んじられていたことを窺わせる。

【國文學】82・10特別企画「紫式部集全歌辭釈」

【蜻蛉日記】の本文には、新潮日本古典集成本を使用した。

このことに関しては、稻賀敬一氏が「新婚早々の新年、しばらくの間は一夜もかかさず式部の所へ泊まつた宣孝は、十日ごろともなると他の女性のごきげんもとらねばならない。その日数をかせぐために、手紙を他の女に見せたの見せなかつたのという情報を、わざと式部の方へ流して腹を立てさせ、「絶える」の「絶えない」のというやりとりで間をもたせつゝ、実は他の女の所でこの受信・発信の業務を統けていたということかもしれない」(日本の作家12源氏の作者 紫式部)新典社⁸²・11)と想像されているのも参考になる。

15に同じ。

(わたなべ けん 岡山大学文学研究科修士課程二年)

【研究室受贈図書雑誌目録】

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 第26号

王朝文学研究誌(大阪教育大学大学院古典文学研究室) 第四号・第五号

王朝文学史稿(王朝文学史研究会) 第十九号

大阪青山短大国文(大阪青山短期大学国文学会) 第十号

大阪樟蔭女子大学論集(大阪樟蔭女子大学) 第31号

大谷女子大国文(大谷女子大学国文学会) 第24号